

(第3種郵便物認可)



勝島 次郎

脳研究への関心が高まっ
ている。子どもの教育から
高齢者の認知能力アップま
で、様々な応用に期待が寄
せられていることが背景に
ある。ビデオやゲームによ
る刺激が脳にどのような変
化をもたらすか計測する様
子を、目にする機会が増え
た。

そうしたなか、昨年八月、
脳損傷患者の脳に電極を埋
め込み電気刺激を与えたら、
意識状態が改善したと
の報告が出て話題になっ
た。ゲームをさせるくらい
ならまだしも、電気刺激は
侵襲の度合いが深く、そこ
までしていいのかと不安に
なる。

この脳深部刺激(DBS)
という医療技術は、疼痛や
パーキンソン病の治療にす
でに使われており、精神疾
患にも応用されているもの
だ。実用化が始まった一九

六〇年代末から七〇年代に
ている。

は、行動や精神の制御につ
ながると問題にされたが、
その後は臨床現場での普及
が進み、論議の対象になら
なくなった。ヒトゲノム研
究がもたらす倫理問題に関
心が集中し、その陰に隠れ
てしまった感がある。

私は、ゲノムやクローン
研究には倫理がうるさく言
われるのに、脳研究にはさ
ほど言われないの不思議

そこで私が重要だと思う
のは、精神外科の歴史と現
在の問題である。悪名高い
ロボトミーを代名詞とする
精神外科は、脳科学倫理で
はほとんど取り上げられる
ことがない。今の脳科学に
は関係ない昔の話、という
感じだ。だが調べていくと、
精神外科の勃興と衰退が、
そのときどきの脳研究と結
びついて、現在の先端治療

一九三〇年代から五〇年代
にかけて、その研究結果に
基づいて手術個所が決めら
れて行われ、手術の結果が
脳研究にデータを提供し知
見が蓄積されるという歴史
があった。前頭前野とその
さらに奥の脳基底部との
つながりを切断すれば、精
神病などを治療できると考
えられたのである。そうし
て臨床例が積み重ねられた
結果、手探りで大きく脳を

切るロボトミーは廃れ、代
わりに、切る位置と量を局
限する定位脳手術が開発さ
れた。その手法が機能的神
経外科という分野で別個に
展開し、今に至っている。

脳科学に研究倫理を

精神外科の歴史に学び

る。その仮説に基づいて、
精神外科手術は欧米の少数
の拠点を中心に行われ続け
ており、精神疾患の治療法
として見直す動きが出てき
ている。脳研究が進めば、
どこを切ればいいのか確実
に分かるようになるとの期待
もある。

このように精神外科の歴
史は脳科学の現在につなが
っていて、将来にも影響を
与えるだろう。だからきち
んと知ってお
く必要があ
る。長年一流
の研究者が相
手にしなが
ら、脳は今も
未知の部分
が多く、人間の

にもつながっていることが
分かる。脳深部刺激の基盤
技術(定位脳手術による電
極埋め込み)は、ロボトミ
ー手術の改良の試みから生
まれてきたものなのであ
る。

十九世紀末以来今日ま
で、脳科学が力を注いでき
た焦点の一つに、大脳の
前頭前野(額の奥あたり)
の研究がある。精神外科は、

脳の基礎研究と脳手術の
臨床とは、表裏一体で進ん
できた。そして今でもなお、
前頭前野と脳基底部のつ
ながり方は分からないこと
が多く、仮説に留まってい

本質を知ろうとするうえで
不可思議な対象だ。それに
見合った畏れと謙虚さを、
研究者と、研究の成果を享
受する一般人がいかに深く
抱き続けられるかが、今後
の脳研究の質を左右するだ
ろう。精神外科の過去と現
在は、そのための格好の教
材になると思う。

(ぬでしま・じろう「生命
倫理政策研究会共同代表」)